

【中国からの日本ウォッチング—人民日報の日本関連記事から】

「日本と中国はどちらも重要な国であり、いつまでも仲良くすべきだ。今、両国の政治的関係は晴天とは言えないが、これはごく一部の指導者がときに勝って気ままな振る舞いをして政府の目標から逸脱してしまっているせいである。私自身は早く雨がやんで晴れ間が出てほしいと願っている」（中曽根康弘）。

この6月13日に、人民日報が＜諦听东瀛有人的心声＞（心をこめて日本の友人の声に耳を傾けよう）というかなりのスペースをとった記事を掲載しました。中曽根氏のほかに、日中協会会長の野田毅・参議院議長扇千景・経済産業大臣二階堂敏弘各氏の日中関係改善に関する発言が詳しく紹介されました。また、北海道の人々の日中関係にかける思いもつづさに掲載されました。その意図はもちろん明白です。

同じ6月に、昨年の上海反日デモの騒乱者の処罰が明らかになり、領事館の賠償問題もようやく決着、ネット上の反日言論も強力に規制されました。胡錦濤主席による、日本の次期首相に対する呼びかけも行われています。上記の記事がこれらの動きと連動していることは言うまでもありません。

東アジア共同体構想が熟っぽく語られる一方で、小泉首相の靖国参拝が醸し出す日中韓のわだかまりも根強く続き、これに領土問題が絡んで、世論調査では、両国とも嫌中、反日感情が依然圧倒的多数を占めています。

今年、日本は首相の交代期であり、中国も来年の党大会を前に、国内の政治的せめぎ合いが活発になっています。こういうときこそ、互いに言動行動を慎み、長期的視野にたって将来を見据え、国内に気を配るあまりいたずらに扇動したり付和雷同することのないよう、大いに気をつける必要があります。